

國學院大學学術情報リポジトリ

聖地運営の担い手と参詣者の関係性：
昭和戦後期における武州御嶽山を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-12-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 彩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001204

聖地運営の担い手と参詣者の関係性

― 昭和戦後期における武州御嶽山を事例として ―

高 田 彩

一、はじめに

近年、山岳信仰や修験道に関わる霊場の担い手が、少子化や高齢化によって減少していることが問題になっている[鈴木二〇一五・三二]。そのような担い手の減少は、従来山岳や霊場を訪れていた講と呼ばれる信徒集団の減少とも連動している。天田顕徳は、このような状況を、「霞・旦那場経済の衰退」と定義した[天田二〇二〇]。そして、「霞・旦那場経済の衰退」が、講以外の経済基盤を確保する必要性を生じさせ、新規顧客の獲得に向けて山伏文化の活用が進められていることを明らかにした[天田二〇二〇・一八〇―一八一]。

こうした課題に対して、現代の山岳や霊場における、講以外の人々を受け入れるための工夫が論じられているが、近世においても山岳や霊場、もしくは当地に属する宗教的職能者と何の関わりも持たない、行楽目的の参詣者が

存在し、彼ら・彼女らを誘致するために、様々な取り組みが行われていたことも指摘されている^①。

併せて、鉄道網の発達によって休日の郊外行楽として社寺を参詣する「普通の参詣人」が誕生したことや、近代以降、参詣地が鉄道網の発達によって、参詣者以外の人々にも開かれた「ツーリズム空間」に変容していく過程を明らかにする研究が蓄積されている〔平山二〇一二、二〇二〇〕〔對馬二〇一二〕〔卯田二〇一五、二〇二〇〕〔乾二〇一六〕。

例えば對馬路人は、関西の私鉄が、霊場・聖地と呼ばれるような場所に鉄道を敷設し、時には参詣者の動員のために、聖地や霊場に対して様々な働きかけを行ったことを明らかにした〔對馬二〇一二〕。加えて、對馬は鉄道会社が、世俗的なエージェントでありながら、聖地や霊場の参詣者を増やすために積極的に戦略を立て実行する過程で、当地の宗教行為を独自に編集する、もしくは新たな宗教習俗を普及させるなど、聖地や霊場をコーディネートする役割を担ったことを指摘した〔對馬二〇一二〕。一方で、聖地や霊場は鉄道会社の提案に従うだけではなく、鉄道会社と交渉を行うことで、少しでも参詣地側の要望を取り入れた計画に変更することを試みた事例も報告されている〔卯田二〇一四〕。

以上のことから、鉄道会社などの思惑だけでなく、聖地や霊場の思惑をも取り入れながら鉄道敷設の計画は推進されており、両者の関係性は一樣ではないことがうかがえる。このように、聖地や霊場などを、従来の参詣者以外の人々にも広く開いて、「ツーリズム空間」とする際には、聖地を運営する担い手のみならず、外部の鉄道会社、観光会社など様々な担い手が関わっているといえる。こうした聖地を取り巻く様々な担い手や、担い手同士の関係性に着目した分析が進んでいることから、以上の成果に加えて、参詣地の運営に携わる様々な担い手と参詣者との関係性を追う必要性があるだろう。

これらの研究を踏まえて筆者は、東京都青梅市の武州御嶽山が平成期に行っていた観光事業を事例に、観光事業の担い手である宗教的職能者の御師が、どのような意識のもと観光事業を行ったのかを検討した「高田二〇一七」⁽¹⁾。その際、講以外の経済基盤を確保するために、どのような人々に向けてどのようなメッセージを発信したのかという点に注目した。また、その観光に関する取り組みの萌芽が、明治末期から大正期にあり、その時期にはすでに講以外の「都市の未知の人」と呼ばれる観光目的の参詣者の受け入れを積極的に行っていたこと、そのような武州御嶽山の動向が資本家の目に止まり、昭和戦前期にはケーブルカーが敷設されたことを明らかにした⁽²⁾。

本稿では、上記の問題意識を引き継ぎ、聖地や霊場がどのような参詣者を受け入れながら存続してきたのかという問いに対して、聖地を運営する担い手の視点から考察を加えたい。その際、ケーブルカーの敷設により輸送手段が整備され、様々な目的や動機を持つ参詣者を受け入れるために宿泊設備が整備された、昭和戦後期の武州御嶽山を対象とする。特に、チラシやパンフレット、武州御嶽山関係者の手記などの資料を用いて、昭和戦後期の武州御嶽山を取り巻く各担い手が、各々参詣者を誘致するためにどのような取り組みを行っていたのか、また、どのような人々を対象として誘致活動を行っていたのかを検討する。その上で、武州御嶽山を取り巻く担い手と参詣者の関係性を明らかにする。

このような聖地運営の担い手と参詣者の関係性の結び方やその変化、バリエーションに着目することで、「ツーリズム空間」の進展が、近現代の山岳信仰に関する聖地・霊場の維持・運営にどのような影響をもたらしたのか分析する手がかりを掴みたい⁽³⁾。

二、武州御嶽山の基礎的情報

ここでは、武州御嶽山の基礎的な情報について記し、以降の議論の足がかりとしたい。

二、一 武州御嶽山の歴史的背景

武州御嶽山は、東京都青梅市に位置し、中世以降、金峰山、武蔵国金剛蔵王権現と称され、関東における蔵王信仰の中心地として人々の信仰を集めてきた。また、徳川家康の関東入国後の天正一九（一五九一）年に、朱印地三〇石の寄進を受け、江戸時代初めには徳川家康の祈願所に指定された「馬場二〇一八・一」。

江戸中期以降の武州御嶽山は、火難除け、盗難除け、豊作の神として広く庶民に信仰された。そこで、御師による布教活動によって御嶽講が各地で結成され、参詣が盛んになっていく。明治以降、その信仰圏は関東全域から、東海、甲信越にまで及んだ「馬場二〇一八・一」。明治末年から大正期にかけての御嶽講の分布とその数について確認すると、埼玉県が最も多く六万三六〇〇余り、次いで東京都が四万七〇〇〇余り、神奈川県が二万一〇〇〇余りで、山梨県なども含めると講の数は三四八五講、講員の数は、一四万四九〇〇余りもあったといわれている「西海一九八三・六八」。このように、御嶽講は関東各地で結成され、数多くの講員がいた。現在、講の実数を把握することは困難であるが、武州御嶽山全体で保有している講の数は、一〇〇〇講ほどにまで減っている¹⁾そうだ。

御師は毎年、講員が代参に訪れる春から夏の期間には、講員に宿を提供し、御嶽参拝を案内した。御師と講とは、御師と檀那（檀家）という世襲的な師檀関係を結んでおり、代参を受け入れる一方で、代参のない秋から冬の時期には、各地の講に配札に出かけた。これを講社廻りという。御師は、年間数百日にわたって各地を回って布教活動を行い、

配札をする一方、三月八日以降、六月初旬にかけて集中して御嶽神社へ代参に来る講に対して、休憩や宿泊あるいは太々神楽の斡旋を行った〔西海二〇一四・一六二〕。

特に、御師にとっての檀家（講社）の保有は、百姓の田畑、山林の所持と同じ意味を持つことから、檀家は御師たちにとって家産として観念されている〔靱矢二〇一五・四七―四八〕。このように講は重要な経済基盤であり、講社廻りでの配札や、講社を受け入れる宿坊経営、太々神楽講中の受け入れは、御師家にとっての大きな収入源といえる。

また、御嶽御師の数は、明暦年間（一六五五―一六五八年）には、御師業を専業としていた山上御師と御師業と農業を兼業していた坂本御師を含めて六〇軒以上を数えたというが、江戸末期の弘化年間（一八四五―一八四八年）には五二軒、戦後には三四軒になっている〔西海一九八三・五二〕。他地域の御師の多くは廃絶・衰退している状況で、武州御嶽山は未だ山上・坂本合わせて三〇軒以上の御師家が残っていることは、全国的に見ても珍しい事例といえよう。

そのような特徴を有する武州御嶽山は、昭和二六（一九五二）年にケーブルカーが運転再開したことや、宿坊営業に加える形で旅館および民宿営業が開始されたことにより、「信仰と観光が同居した形」で発展していったといわれている〔西海一九八三・三一―三二五〕。その背景には、昭和四（一九二九）年に青梅線御岳駅が開設されたことや、昭和一〇（一九三五）年に御岳登山鉄道が開業したことなどの、交通網の発達によって、従来の信仰地としての機能に観光・遊覧地としての機能が付加されたことが関係している〔東京都教育委員会一九八六・九―一一〕。

二、二 武州御嶽山の組織と運営

本節では、武州御嶽山がどのような組織によって運営されているのかを確認する。西海は、「御嶽山は、そこで生活する人々にとって一つの地域であるだけでなく、御嶽神社をなかだちとした、儀礼やその他諸々の生活慣習を共通

項とする、社会集団の場」と論じている「西海一九八三・二九三」。そのため、まず、武蔵御嶽神社を運営する組織について概観していく。武蔵御嶽神社は、山上御師と坂本御師の合議制で運営されている神社である。ここでは、武蔵御嶽神社を運営するための組織について確認していく。

現在、武蔵御嶽神社は、宮司一名、本務員一二名とそれ以外の非常勤一八名で構成されている。神社運営に関わる御師を責任役員といい、この責任役員全員が宮司と本務員を選出するための選挙権を持っている。選挙は毎年六月三〇日に行う夏越の大祓式の際に開かれる全体会議にて行われる。この会議には責任役員が全員出勤する。宮司の任期は三年、本務員の任期は二年で、本務員一二名は、会計部、神符部、祭事部、総務部の四つの部署に三名ずつ配属される。さらに、本務員、非常勤とは別に、神社の祭礼に関わる祭典執行者を祭事部がその都度選定する。

その他の臨時の祭務として、太々神楽の奏上がある。太々神楽が奏上される日は、本務員とは別に勤番が一名付く「鈴木一九八六・一一六」。この勤番は、責任役員全員が回り番制で担当している。このように、武蔵御嶽神社の運営にあたっては、常勤の本務員と祭典執行者との、二重の祭祀組織の構造がみられることが特徴である「鈴木一九八六・一一七」。

三、国立公園の指定

それでは、昭和戦後期の武州御嶽山の動向を確認していこう。まず、戦後の画期として、昭和二五（一九五〇）年に、御嶽山周辺一帯が秩父多摩国立公園に指定されたことが挙げられる。先行研究においては、武州御嶽山とその地域一帯が秩父多摩国立公園に指定されたことにより、御嶽山は観光化していくことになったと指摘されている「西海

一九八三」。本章では、国立公園指定によって武州御嶽山にどのような影響があったのか明らかにするために、国立公園の指定によって、御嶽山に外部からどのようなまなざしが向けられるようになり、その結果、観光地としてのイメージが形成されるに至ったのか、また、外部からのまなざしやイメージを御嶽山の住民たちがどのように取り込んで、利用していたのかを検討していきたい。

上記の目的を達成するため、国立公園指定に関連して作成されたチラシやパンフレット、報告書などの資料を用いて、国立公園指定に伴い、武州御嶽山のどの部分が強調されて紹介されているのか、また、観光地としての御嶽山は外部からどのように評価されていたのか、そして、そのような情報を御嶽山はどのように捉えていたのかを明らかにする。

三、一 奥多摩を代表する観光地としての武州御嶽山

まず、『観光の大多摩』という資料を確認しよう。この資料は、東京都に国立公園ができたことを記念して発行されたものである。⁽⁵⁾

また、この『観光の大多摩』が発行されるまで、大多摩に関するまとまった資料はなかったため、事実上、本書が大多摩を総括する初めての案内書であった「秩父多摩国立公園」指定祝賀大多摩奉賛会一九五〇・一」。本資料では、大多摩は温和なあたたかさがあり、「内地人の日常観光」に対して日本を代表する地域だという自負があると述べた上で、観光の雰囲気ばかりではなく、自然科学の教室としても価値があるとし、見所の多さをアピールしている「秩父多摩国立公園」指定祝賀大多摩奉賛会一九五〇・一三」。それでは、以下、大多摩において武州御嶽山とその周辺地域がどのような場所と位置付けられていたのか、本資料の内容を確認することで明らかにしていく。

青梅線御岳駅は「奥多摩景勝時代」から御岳山御嶽神社をもって代表的な観光地でありました事は、皆様の想い出に新たな親しみが湧きでることでありましょう。……中略……「御嶽山」これこそ、昔日の奥多摩の「シンボル」として愛好の的でありました。

又、近く完成するケーブルカーのあの景勝も利用できますし、小説「大菩薩峠」に出てくる老杉立並参道の「霧の御坂」をゆっくり登れば小供（注：ママ）や老人にも登れます。神社参拝、畠山重忠の冑その他国宝の見学、御嶽平・日の出の展望・七代滝・天狗岩の探勝等、一日では見切れない景観です。

山上御嶽神社の斎館分舎お師の家を「都民観光の家」として開放いたし安易な山の宿として公開しております
「秩父多摩国立公園」指定祝賀大多摩奉賛会一九五〇…六三一六四」。

本資料において、武州御嶽山や武蔵御嶽神社は、奥多摩における「代表的な観光地」であることが前提とされており、ケーブルカーが再開すれば、子どもや老人にも登りやすくなると述べられている。そして、この資料ではその他の見所として、御嶽平やそこからの展望、七代の滝、天狗岩など、江戸、明治、大正期においても武州御嶽山の名所として紹介されていた場所が引き続き登場している。

一方で、従来の案内記とこの資料の異なる点として、「山上御嶽神社の斎館分舎お師の家を「都民観光の家」として開放」しているという記述が挙げられる。さらに、都民観光の家についての記述を確認すると、「御岳駅より徒歩約二時間御岳神社斎館分舎（御師の家）五軒を特に観光客用として開放されました。夏期学校に最適です。費用〓三田村御岳山、片柳健二郎宅に照会の事」と説明されている「秩父多摩国立公園」指定祝賀大多摩奉賛会一九五〇…八九」。

この記述によると、御嶽神社斎館分舎（御師の家）五軒を観光客用に開放したことがうかがえる。併せて、都民観光

の家の使用用途として、「夏期学校」を勧めている。そして、その旨は三田村御岳山の片柳健二郎に照会することと指示がある。片柳健二郎は、しんやという屋号を持つ御師で、都民観光の家に指定されている山楽荘を経営していた。⁽⁶⁾このように武州御嶽山は、国立公園に指定されたことにより、案内記やチラシ、パンフレット類において、「観光地」という表現で紹介されるようになった。また、これまで「御師の家」と表記されていた宿坊は、「都民観光の家」と表記されるようになったことは特徴的であろう。

次に、『大多摩の観光ガイド』を参照（写真1参照）。「大多摩」とは、多摩川及秋川の流域を含む全西多摩郡に大菩薩峠、柳沢峠以東の山梨県小菅村・丹沢山村の全部と神金村の一部、つまり多摩川水源の全流域を併せた名称である。このチラシは、上述の地域の有力者によって組織される社団法人大多摩観光協会が作成したもので、発行年は不明である。しかし、秩父多摩国立公園について紹介する内容となっていることに加えて、武州御嶽山の宿坊を紹介する際に「都民観光の家」という表現を使用しているので、昭和二六（一九五二）年以降に作成されたものと推測される。また、このチラシには、秩父多摩国立公園の観光案内図が掲載されており、裏側には、秩父多摩国立公園の説明と青梅線および五日市線の駅と紹介文が記されている。以下、説明文を引用する。

秩父多摩国立公園 大多摩は東京の奥庭であって利用価値の最も高い国立公園です。学童の遠足、ハイキング、キャンピング、川釣り、



写真1 『大多摩の観光ガイド』(推定昭和26年以降)
(たましん地域文化財団歴史資料室所蔵)

更に二〇〇米級の登山、ウィンタースポーツと四季を通じて凡ゆる種類の行楽が極めて安易に出来ることが他所に見られない特徴です。春秋のハイキングシーズンには、ウィークデーに新宿から氷川まで直通の自然科学電車、休日には新宿氷川間に直通電車が運転されます。この外は中央線を立川で乗り換えて国電青梅線或は五日市線へ。都心からに時間乃至二時間半。

このチラシでは、秩父多摩国立公園の特徴として、学童の遠足、ハイキング、キャンピング、川釣り、登山、ウィンタースポーツなど四季を通じてあらゆる種類の行楽が極めて安易にできることが挙げられている。次に武州御嶽山の最寄駅である青梅線の御岳駅についての紹介文を見てみよう。

御嶽駅（青梅から二〇分）駅前射山溪徒歩都下唯一の屋外スケートリンク。夏のキャンプ冬のスケートは人気の中心。名峰御嶽山は観光大多摩の中心でケーブルカーが評判を呼んでいる。御嶽山は雲表三千尺、東京近郊最大の展望台で明治初年英国パークス公使が眼をつけて住んだ所。滝あり溪流あり、老樹鬱蒼とした神社には国宝が沢山保管されている。都下で一番多い（一五〇種類）鳥の名所で仏法僧は特に有名。生徒の遠足。一般のハイキングに好適。都民観光の家は簡易な休憩宿泊に開放されている。

御岳駅の紹介文では、武州御嶽山が「観光大多摩の中心」と位置付けられ、その目玉として、ケーブルカーが挙げられている。また、「明治初年に英国パークス公使」が宿泊した旨を喧伝することで、御嶽山を由緒ある避暑地とし、観光客を呼び込もうと考えていたようだ。

上述した『観光の大多摩』においては、山内の名所の具体的な名前が登場していたが、このチラシにおいては、「滝あり溪流あり、老樹鬱蒼とした神社」と書かれているのみで、詳細は省略された代りに、新たに「鳥の名所」という説明が加えられている。滝や溪流があり、数多くの鳥が生息していることを宣伝することで、遠足やハイキングに最適である旨を強調しているようだ。さらに、遠足やハイキングで訪れた人々に向けて、都民観光の家が開放されていることも記載されている。

このことから、神社や山内の名所の紹介に代表される武州御嶽山の歴史的な資源よりも、御嶽山の自然が強調され、遠足やハイキングなどを目的とする観光客を取り込もうとしていたことが推測される。

続いて、昭和二七（一九五二）年に、御嶽観光協会が発行したパンフレット『国立公園奥多摩 観光の御嶽』を確認したい。このパンフレットの作成者は、山上の宿坊や食事処・土産物屋などの代表者によって結成される御嶽観光協会であり、いわば御師をはじめとする山内居住者の視点から作られた資料といえる。このパンフレットでは、武州御嶽山とその周辺の絵図が掲載され、御嶽山の観光名所が紹介されている。絵図には、東京から新宿を経由して立川まで行く路線と、立川から小河内までの青梅線の路線を横長軸に描き、国立公園の入り口から武蔵御嶽神社の奥の院に至るまでの沿線名所が描写されている。絵図の中で、青梅線の御岳駅から武蔵御嶽神社にかけては、稲毛屋やぎん鈴、みたけホテルという宿泊施設の名前が記載され、ケーブルカーやバス停、駐車場などの各交通機関についても同様の記載が見られる。

また、ケーブルカーから武蔵御嶽神社に向かう途中に、従来から観光名所として紹介されていた長尾平や七代の滝、ロックガーデン、綾広の滝などと併存して、都民観光の家と鈴木旅館の名が記載されていることは注目すべき点である。本パンフレットと同様、絵図が掲載されている昭和四（一九二九）年の『御嶽山案内』では御嶽神社の境内の様子

が詳しく描写されていたが、この『国立公園奥多摩 観光の御嶽』に添付されている絵図には、御嶽神社の境内の詳細は省略され、御嶽神社と奥の院が描写されているのみである。⁷⁾つまり、神社境内の詳細な情報よりも、宿泊施設や交通機関に関する情報の方が重要視されていたと解釈することが可能であろう。

それでは、パンフレットの内容を確認していく。まず、「国立公園奥多摩 御嶽というところ」という見出しで、秩父多摩国立公園における武州御嶽山の位置付けを説明している箇所をみていこう。

国立公園奥多摩 御嶽というところ

東京都にある国立公園、それは多摩川の上流、奥多摩の景勝地で日本で第一六番目に指定された秩父多摩公園の玄関に当たるところです。奥多摩はこの国立公園の特色とする溪谷の美しい代表的な地域で東京から五〇料、二時間足らずで訪れることが出来る大自然境であつてこの奥多摩の中心であり入り口部分に当たるところが御嶽であり御嶽山です。……中略……国立公園の人口部分、沢井駅、御嶽駅の間、又この少し上流までに散在して多くの旅館がありますことは、何といつても奥多摩の中心地を示すものです。……中略……駅前から御嶽山ケーブルカー行きのバスで約十分。雲表三千尺御嶽山にかゝるケーブルカーは快適な近代的なもので、乗車僅か八分で（大人上り五〇円、下り四〇円、往復八〇円）御嶽山上の大展望場につきます。ここが往古から有名な武州御嶽山です。御嶽山の中心は樺真智命を御祭神とする御嶽神社で四方に四つの大展望場、ピクニック場、ロックガーデンなどの施設、山小屋、旅館、都民観光の家、散歩道などあらゆる観光施設が完備しています。

上記の説明によると、武州御嶽山は、「奥多摩の中心であり入り口部分に当たる」重要な場所だと述べられ、青梅線

の御岳駅から御嶽山に行く交通手段や運賃も記載されている。加えて御嶽神社の紹介がなされ、大展望場、ピクニック場、ロックガーデンなどの施設、及び旅館や都民観光の家などの宿泊施設を完備していることにも触れている。そして、「国立公園奥多摩 御岳というところ」は、以下の文章で閉じられている。

更に旅館、御岳山上の都民観光の家などを利用しての句会、集会（宴会）などにも適しているとは以上のようなこの地方として当然といえましょう。こんなすばらしい観光地が東京のこんな近くにあることを御存知ない方が多いのではないのでしょうか。是非一度御運び下さい。必ず奥多摩ファンになられるでしょう。

この文章で興味深い点は、「こんなすばらしい観光地」として、武州御嶽山とその周辺を捉え返していることである。そして、このパンフレットには、武蔵御嶽神社の説明の箇所祭神の櫛眞智命の名は登場するものの、武蔵御嶽神社や御嶽山信仰の中核をなす、おいぬさまおよびおいぬさま信仰、祭神大日真神の名は登場しない。

その上、昭和戦前期までのチラシやポスター、参詣案内記にみられる御嶽神社や御師についての記載はなく、従来、「御師の邸宅」や「講社の旅宿」などと表記されてきた宿坊が、旅館や都民観光の家という名称に改められている。つまり、昭和二五（一九五〇）年と昭和二六（一九五一）年に、「秩父多摩国立公園」指定祝賀大多摩奉賛会が発行した資料が作り上げた武州御嶽山のイメージを、御岳山観光協会が取り入れて、昭和二七（一九五二）年発行の『国立公園奥多摩 観光の御嶽』を作ったと読み取ることができる。

四、交通網の発達と御岳登山鉄道の働き

続いて、戦後の武州御嶽山に大きな影響を与えた交通網の発達について確認していく。

四、一 戦後の青梅線と観光路線の拡張

戦中の昭和一九（一九四四）年四月に青梅電気鉄道は国鉄に買収され、国鉄青梅線となった。同年七月、建設が進められていた奥多摩電気鉄道の御嶽―氷川間が完成、同時に国有化され青梅線に編入された。それと同時に、青梅線は立川―氷川間が全通した「青梅市郷土博物館二〇一四・九五」。

戦後は、石灰石を主力とした貨物輸送に加え、しばらくは、旧陸軍の航空関連施設を接収した在日米軍基地がある立川への通勤需要、高度経済成長期以降の沿線のベッドタウン化による通勤通学需要を背景として旅客輸送が急増していく。そこに、行楽地としての奥多摩方面への観光輸送が加わり、青梅線は東京近郊路線として発展していくこととなる「同・九五」。

また、戦後に、奥多摩が首都圏の行楽地として注目されたことにより、昭和三〇―四〇年代の青梅線は、行楽路線としての機能が高まっていく。昭和三三（一九五八）年に新宿―御岳間で運転が開始された行楽臨時列車「吉野観梅号」が皮切りとなり、昭和四三（一九六八）年には、新宿―御岳間の休日臨時快速「みたけ」のシーズン運行が開始された。昭和四六（一九七二）年には奥多摩への延長が行われた。この新宿―御岳間の休日臨時快速「みたけ」のシーズン運行は、現在の「ホリデー快速」の運行につながっている「青梅市郷土博物館二〇一四」。そして、昭和四四（一九六九）年に千葉―御岳間臨時急行「御岳もみじ号」が運転されたことをはじめ、首都圏各方面からのシーズン

運転の直通臨時列車も設定された「同…九八」。

上記のように、戦後の青梅線は、春には観梅のため、夏には林間学校のため、秋には紅葉狩りのため、冬には初詣のため、季節ごとの臨時列車を運行した。加えて、休日には新宿から御岳、奥多摩への臨時快速列車を運転した（表1参照）。

四、二 御岳登山鉄道の再開とその影響

戦時下の昭和一九（一九四四）年に御岳登山鉄道は不要不急線とされ、休業することとなるが、戦後の昭和二六（一九五二）年に営業を再開する。以下では、再開直後の御岳登山鉄道に入社し、武州御嶽山への旅客誘致に注力した職員の影山豊の活動内容を彼の手記から振り返り、その活動が御嶽神社や宿坊などにどのような影響を与えたのか明らかにしたい。

具体的な活動内容を確認する前に、まず影山の簡略なプロフィールを記す。影山豊は、昭和二六（一九五二）年に御岳登山鉄道株式会社に入社し、滝本・御岳山駅長を務めた。また、昭和三五（一九六〇）年には旅客課長、昭和四一（一九六六）年には総務部次長を兼務した。影山は、武州御嶽山が都内の観光地として注目されるよう環境整備を行い、山外に御嶽山を宣伝した人物である。以下、その活動内容を紹介していく。

表1 昭和30年代以降の青梅線臨時列車一覧

年	列車名（運行区間）
昭和33(1958)年	行楽臨時列車吉野観梅号（新宿～御岳）
昭和38(1963)年	御岳神社初詣臨時列車（大宮～御岳）
昭和40(1965)年	御岳山林間学校号
昭和43(1968)年	休日臨時快速みたけ号（新宿～御岳）
昭和44(1969)年	臨時急行御岳もみじ号（千葉～御岳）

四、二、一 武州御嶽山の知名度を上げるための宣伝活動

影山が旅客課長に着任した昭和三五（一九六〇）年当時、武州御嶽山の知名度は、近隣の高尾山に比べて低かったという「影山一九七九・一五二」。また、「どの観光地図を見ても名勝地のシルシとして「奥多摩」と印刷されているも、「御岳山」と印刷されておらず、御岳山は奥多摩の一部として扱われており、「観光会社でさえも御岳山のことを知らない状況」を影山は問題視していた「同・一五二」。

このような状況を改善するために影山は、関東地区の旅行業協会のもとを訪ねて武州御嶽山の資料を渡し、出入りする業者が資料を自由にとって帰れるようにした。併せて、武州御嶽山の知名度を向上させるため、奥多摩に関心の深い業者や、御嶽山のことを知らない業者を記録、整理して御嶽山へ招待した。その他にも、より広く一般の人に武州御嶽山を知ってもらうため、国鉄、西武バス、西武鉄道、京王帝都電鉄、立川バスなどに協力を要請し、観光ポスターやタイアップ広告を作成した「影山一九七九・一五三」。

以上の影山の活動が実を結び、昭和四五（一九七〇）年に、これまで「御岳山」の名が掲載されていなかった東京バス協会・観光部会発行の貸切バス営業便覧に御岳山の名が加わることとなった「影山一九七九・一五四」。

四、二、二 青梅線・西武拝島線の大晦日終夜運転

上記の活動に関連して、青梅市観光協会と武蔵御嶽神社は、昭和三三（一九五八）年一月、東京都鉄道管理局へ初詣客誘致のために、青梅線に臨時電車の増発を陳情した。それにより、同年の大晦日には、青梅止まりの電車二本が御岳駅まで延長されることとなった「影山一九七九・一五五」。

この電車の利用客の増加を目指し、昭和三五（一九六〇）年に影山は、さらなる初詣客の誘致活動を展開していく。

以下、誘致活動の具体的な内容について、影山の手記を引用しながら説明していく。

御岳神社の神主さんは裕福なのだろうか、初詣客の誘致には高尾山のお坊さんに比べると関心が薄いように感じられたが、とにかく、チラシを二万枚作って池袋・新宿・渋谷・中野・吉祥寺等の駅頭に立って通勤者を対象に配った。一緒に行ってくださったのは、青梅市役所の渡辺観光課長、御岳神社代表金井俊雄氏と須崎直衛氏、御岳観光協会副会長の宇佐美伸太郎氏、そして会社から木村専務と私、とにかく寒風吹き荒れる冬の日のビラ配りは本当につらかった「影山一九七九・一五五」。

また、昭和三五（一九六〇）年当時、影山は、「多客期、特に休日には、延々とケーブルカーを待つ人の列ができるが、冬季はまったく閑散としていて、一カ月の収入が多客期の一日分にみたないこともあった」ことを問題視し、閑散期にケーブルカーの利用者を増やすことが課題であると考えていた「影山一九七九・一五五」。そこで、影山は初詣客の誘致を計画したが、「御岳神社の神主」、すなわち御師たちは当初、初詣客の誘致には積極的ではなかったという。それでも武蔵御嶽神社からは、金井俊雄氏と須崎直衛氏がビラ配りに参加した。このビラ配りが功を奏し、初詣客が増加していく。そして、増加傾向にあった初詣客を輸送するため、新宿からの直通運転御岳初詣号が運行されることとなる。

この初詣客の誘致活動の効果によって、昭和四五（一九七〇）年の大晦日に青梅線はさらに二本の臨時電車と、新宿からの直通運転御岳初詣号を増発した。こうして、大晦日の終夜運転が約四〇分間隔で実現した。青梅線のようなローカル線で、初詣客のための終夜運転は異例のことであった。影山は、その後も初詣客の電車の利用率を高める

ために、「青梅線の終夜運転の時刻と御岳山初詣のチラシを毎年、各鉄道案内所や駅へ配布したり、新宿駅の地下道へ、「初詣御岳山」の大提灯を吊るしたり、同じく横断幕を作り、高田馬場、新宿、渋谷、中野、吉祥寺、立川、拝島、青梅の各駅ホームへ張り出し、立川駅の南・北口にはカド松も立てて初詣客の誘致を計った」〔影山一九七九・一五六―一五七〕。

また、初詣客の誘致活動は、武州御嶽山の知名度を上げることに繋がつた。国鉄が「明治神宮や川崎大師と同列に扱ってくれることから初詣の旅客が増えた。国鉄が扱うポスターや中吊広告にも御岳神社が入るようになり、おかげで大晦日から元旦にかけては多客期と同じように駅前に行列ができて初詣にふさわしい風景が感じられた」という〔影山一九七九・一五七〕。

そして、青梅線に加えて昭和四三（一九六八）年の大晦日から拝島線でも終夜運転が実現し、三〇分ごとに運行されることとなった〔影山一九七九・一五七〕。以上のような宣伝と輸送態勢により、「土産店も繁昌し、神主さんのお宅も泊り客や休憩のお客さんが増え、お礼も沢山売れるようになった」〔影山一九七九・一五七〕と自身の活動を評価している。

四、二、三 国鉄の周遊指定地

様々な広報活動により武州御嶽山の知名度が向上してきた昭和四〇年代、影山は御嶽山をどうにかして国鉄の周遊指定地に加えることはできないかと考えていた。昭和四二（一九六七）年、影山が、「日本交通公社の親しい友人」に相談したところ、武州御嶽山の周遊指定地の件を国鉄に提案することを勧められ、同年の末にある国鉄との会議に間に合うように資料作成を依頼された〔影山一九七九・一六〇〕。

影山は、武州御嶽山を国鉄の周遊指定地にするため、「機に応じて観光協会や旅館連盟の人たちに根気よく根回しをして」、昭和四二（一九六七）年九月、青梅市長、奥多摩町長、青梅市、奥多摩観光協会長、旅館連盟会長の連盟で、「御岳山・奥多摩の周遊指定地についての要望書」という文書を作り、国鉄関東支社長と、日本交通公社、日本旅行会、近畿日本ツーリストの各社長宛に提出した「同…一六一」。

このとき各社へ陳情に行ったのは、御岳神社から金井俊雄氏、御岳山観光協会長片柳健二郎氏、旅館連盟会長宇佐美伸太郎氏と、会社から木村専務と影山であったという「同…一六二」。そして、同年一〇月、東京鉄道管理局経由で、国鉄関東支社長に、「指定地接続線に関する申請書」を提出し、翌年の昭和四三（一九六八）年六月二五日付の旅総第五四一号の四で、国鉄本社旅客局長から正式に周遊指定地に承認された「同…一六一―一六二」。

併せて、日本交通公社、日本旅行および近畿日本ツーリストの各社と周遊船車契約締結の手続きを進め、周遊割引の許可を得るよう指示が出た。その指示に従い、東京陸運局長宛に「周遊旅客運賃割引制定許可申請書」を提出し、同時に日本交通公社他二社と周遊船車発売契約を結んだ「同…一六二」。

その後、昭和四七（一九七二）年八月には、東武トラベル、日本交通公社、名鉄観光の大手旅行とも契約を結んだことで、「御岳山・奥多摩が全国的に観光地として認められた」⁽⁸⁾「同…一六二」。

以上のように、御岳登山鉄道職員の影山によって、様々な方法を用いて武州御嶽山は宣伝された。また、影山は、従来武蔵御嶽神社では積極的に行われてこなかった初詣に着目し、神社や御師に働きかけて初詣客の誘致活動を共同で行ったことに加え、国鉄の周遊地指定に関しても御嶽山観光協会や神社と共同で要望書を作成し陳情している。このことから、影山は、乗車客の増加にかかる活動のみならず、武州御嶽山や武蔵御嶽神社の運営方針に対して意見をし、その運営方針の一部を転換させる活動も行っていたと理解できよう。

五、林間学校の誘致と合宿、研修会の利用

これまで、昭和二〇～四〇年代の武州御嶽山の状況を、鉄道会社の活動と、そこで働くキーマンに着目して論じてきた。以降は、昭和三〇年代からはじまる林間学校の誘致と合宿や研修会での武州御嶽山の宿坊利用について論じる。特に本稿では、教員の研究合宿を中心に論じることとする。

五、一 林間学校の誘致

戦前から武州御嶽山では、避暑地、学習地として官吏、学生を受け入れてきた。⁽⁹⁾ そのような流れを引き継いで、宿坊では、春の代参シーズンが終了した夏に、林間学校を開催する小中学校を受け入れてきた。新聞記事によると、昭和三〇（一九五五）年には、「地元PTA主催」の「御嶽林間学校」が開かれたという。以下、新聞記事の内容を示す。

朝日新聞 昭和三〇（一九五五）年八月八日 朝刊

〈御嶽山で子供交歓会 都林間学校と地元小学生ら 子供会〉

東京都民の奥庭、奥多摩の各キャンプ場は小、中学生の夏季□設で例年にないにぎわい。とくに御嶽山頂の「都民の家」（御嶽神社神職宅）二九軒を開放した地元PTA主催の御嶽林間学校は、初日の先月二一日から連日小さいお客さんで満員続いだ。六日夜は、文京区明化小学校、豊島区高松小学校など一三校一二〇〇人に達し、地元の小学生たちと、納涼こども交歓会を開いた。老杉が夜空に吸い込まれる神社広場に、ユカタ、パジャマなど、思い思いの姿で集ったお客側と地元の子供らは、山の冷気にエリを合わせ、ムシロ、石段などに陣取って

各校の芸能コンクールに声援しきり。地元の子供らは「御嶽しまうた」(河合玉堂画伯の作)をひろうして拍手を浴びていた。

記事によると、昭和三〇(一九五五)年には、宿坊二九軒を開放し、都内の学校一三校一二〇〇人を受け入れたという。この御嶽林間学校を主催した「地元PTA」は、青梅第六小学校分校御岳校舎、つまり武州御嶽山の住人を指していると思われる。この御嶽林間学校では、「納涼こども交歓会」が開催され、地元の子どもたちと、御嶽山に訪れた子供たちが一緒に遊んでいることも特徴的である。

また、昭和三五(一九六〇)年七月二一日の朝日新聞朝刊によると、宿坊三四軒が都内小中学校を受け入れおり、八月末までは林間学校の宿坊利用が続くことが記載されている。⁽¹⁰⁾このように、昭和三〇年代は、夏期に林間学校のために多くの小中学生が武州御嶽山を訪れていたことがわかる。こうした林間学校の受け入れについては、正確な時期は定かではないものの、当時の御岳観光協会長が、東京都の教育委員会にかけあつて実現したことだといふ。⁽¹¹⁾

さらに、武州御嶽山では、昭和三八(一九六三)年からは、横浜に本社があるブルー観光と提携し、林間学校の団体受け入れを開始する。このブルー観光は、主に横浜方面の小・中学校の林間学校を斡旋していた企業であり、提携していた宿坊は、一〇軒ほどあったといわれている。つまり、山上集落の宿坊の三分の一ほどが、ブルー観光と提携していたことになる。ブルー観光が斡旋した林間学校利用校数をまとめたものが図1である。

図1を確認すると、昭和三八(一九六三)年の受け入れ開始時は、林間学校の利用は一校であったが、一五年後の昭和五三(一九七八)年には九校と徐々に増加し、平成五(一九九三)年には五〇校以上の利用があった「東京都環境局自然環境部二〇一一・五」。この林間学校の利用校の減少は、平成初期に、横浜市が自前の施設を設置したことで、

横浜方面からの林間学校の利用がほぼなくなったことに起因している。

昭和三〇年代に引き続き、昭和四〇年代も、夏期の武州御嶽山が都内、神奈川、千葉、埼玉などからの林間学校を行う小中学生で賑わっている様子が伝えられている。また、昭和四四（一九六九）年の記事では、「ことしの利用者は二四九団体、約三七〇〇〇人で昨年の一割五分増。一般の行楽客が七月、八月で一二万人といずれも開山以来の記録だった」と報じられていることから、林間学校での利用がさらに増加し、「開山以来の記録」と称されるほどの小中学生が御嶽山を訪れていることがうかがえる。

そして、昭和四六（一九七二）年の記事では、「林間学校第一陣は都内、横浜などの一校から一五〇〇人。普段は三〇分に一本の登山ケーブルも、六分間隔でピストン輸送。……中略……林間学校申し込みは年々ふえ、ことしは八月中旬までにざっと百五〇校、三万人のチビッ子客が予定されている」。

以上の新聞記事から、昭和四〇年代は、二四九団体が林間学校のために宿坊を利用し、三万人以上の小中学生が夏期の武州御嶽山を訪れたことが確認できた。

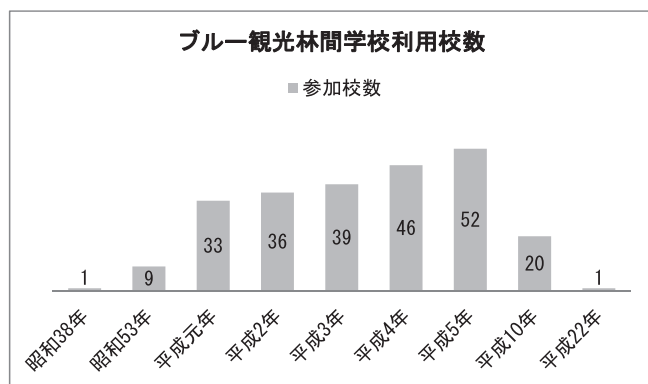


図1 ブルー観光林間学校利用校数

東京都観光局自然環境部編 2011『御岳ビジターセンター周辺環境基礎調査報告書』より筆者作成

五、二 合宿、研修会の利用

戦前から避暑地、学習地として官吏、学生に利用され、林間学校の受け入れも行っていた武州御嶽山では、昭和三一（一九五六）年八月から毎年、東京都の小学校・中学校・高校の教科研究員の研究合宿が行われていた。

研究合宿は小学校部会、中学校部会、高校部会の三つに分かれており、それぞれの部会が、二泊三日ずつ武州御嶽山の宿坊に宿泊した。例えば、小学校部会の研究合宿が終了すると、入れ違いで中学校部会の教科研究員が武州御嶽山に集合し、そこから今度は中学校部会の研究合宿が始まる。同様に、二泊三日の中学校部会の研究合宿が終了すると、今度は高校部会の研究合宿が開催される。そのため武州御嶽山の宿坊は、八月中は一週間程度、東京都の小・中・高の研究合宿を受け入れることになる。

この研究合宿の目的は、「いつさいの雑事から解放して、研究に専念できる場を提供して、一段と深い研究をまとめるようにすること」であり、授業や実態調査を通じて集めた現場的問題解決の資料を持ちより、「同一宿舎に寝食を共にして十分研究を深め」、「研究員相互のよい人間関係」を作ることだった「江口一九六〇・六九」。

そのような目的で行われた昭和三六（一九六二）年の研究合宿には、小・中・高全部で約六〇〇人が参加した。この六〇〇人は、一〇軒の「宿舎」に分かれて泊まった。以下、研究合宿のスケジュールや教科研究員の武州御嶽山や宿坊に関する感想を、『教育じほう』から紹介したい。研究合宿のおおよそのスケジュールは次の通りである。¹³⁾

一日目は、各自昼頃に武州御嶽山上に集合する。そして、青梅第六小学校御岳分校の校庭で合宿の開講式が行われた後、各担当教科別に研究会が始まる。一七時頃になると研究会は終了し、入浴と夕食を済ませる。風呂に関しては、「毎晩たてられ、一日の疲れをいやしてくれるのである。ふろに大小があって、宿舎によっていろいろであるのはいたしかたない」と、合宿に参加したメンバーは述懐している「江口一九六〇・六九―七〇」。この記述から、昭和

三〇年代時点では、未だ旧的な住居形態を残す宿坊が多かったことが察せられる。また、夜も二時間ほど研究会が開催される。夜の研究会は二一時頃に終了し、その後支度をして各自二二時頃に床に着く。

二日目は、六時に起床すると、御岳分校の校庭にて全員参加の体操が行われる。その後各宿坊で朝食をとり、八時頃から午前の研究会が始まる。昼の休憩を挟んで、また午後から研究会を行い、一八時頃に終了する。二日目の夜は、各教科で懇親会が開催されたようだ〔江口一九六〇・七〇〕。

最終日の三日目も、二日目と同様に起床後、体操、朝食を済ませると、午前の研究会が始まる。最終日は、教科ごとに報告会と反省会が行われて、研究会が閉じられる。研究会終了後、教科研究員の人数が多い小学校部会と中学校部会は、昼食を摂り各自下山するが、小学校部会と中学校部会と比べて人数の少ない高校部会は、最終日の研究会終了後、御岳神社にて太々神楽を見学してから帰宅している。この太々神楽の演目は、「各宿舎の御師の方々が、この研究会のためにとくに神楽を選んで、自ら奉納してくださったもの」であった〔佐原一九六一・六九〕。

研究合宿の大まかな流れを確認したところで、続いて、参加者である教科研究員の合宿に関する感想を紹介し、この研究合宿がどのような人々によって運営されていたのか、また、合宿中の宿坊はどのような状況だったのか、捉えてみたい。それでは、教科研究員が『教育じほう』に寄稿した報告をみていこう。

この研究集会に対する御岳の人々の協力は、大変なものである。青梅市教育委員会をはじめ、青梅市立青梅第六小学校は全力をあげて、会が成功のうちに終了するように、夏休み中にもかかわらずご援助をいただいている〔江口一九六〇・六八〕。すなわち、宿舎の決定に、宿舎の案内にと、積極的に協力していただいている〔江口一九六〇・六八〕。

まず、研究合宿を迎え入れる人々について確認していく。上記の記述では、「御岳の人々」及び青梅市教育委員会、そして青梅市立青梅第六小学校の名前が挙がっている。これらの運営主体の内容についてさらに詳しく見ていきたい。

研究集会の会場として使用した宿舎は、全部で一〇軒である。ケープルの駅から一番近い一帯のもので、青梅第六小学校の分校もすぐそばで、印刷につごうのよい宿舎である。

御岳は、御岳神社を中心とする講中の御師として発展した部落である。ところが、講中が山に登ってくるのは、一年中のうち特定の時期であることや、御岳に登山する客が夏に多くなったことなどから、御師が宿を提供することになったものらしく、今は、林間宿舎として利用する学校も多い。したがって、普通の旅館とは異なり、四畳半の小部屋なんていうものではなく、大広間である。しかもその家族の人々だけで食事の世話から床のあげさげまでするので、サービスも普通の旅館なみのものではない。しかし、御岳の人々は、心から研究員を歓待して、研究員がますます成功するよう心掛けてくれるので生活は快適である……中略……年々改造されてよくなっているのは、研究集会にとってはいずれのことである「江口一九六〇・六九一七〇」。

「御岳の人々」は、御師とその家族を指している。また、研究合宿の宿舎は、御師が営む宿であり、普通の旅館とは異なっている旨が明記されている。そのため、個室はなく、設備も整っているとは言い難い状況だと述べられている。また、食事や布団の上げ下げは全て御師の家族で行っているため、サービスのにも十分とは言えないが、「御岳の人々」は、研究員を心から歓迎してくれるので、「生活は快適」との評価がなされている。

また、研究合宿中、研究員がどのように過ごしていたかという点、「三〇畳から四〇畳敷きの広間」で食事の際も、

研究会の際も「食卓兼机を長方形に並べて、全体会を開いたり、いくつかのグループに分かれて討議したり」していたようだ〔佐原一九六一・六六〕。恐らく使用できる部屋は大広間のみなので、就寝する際も、大広間に布団を敷いて雑魚寝していたと思われる。このような宿坊でのもてなしを、「宿舎のかたがたが、誠心、誠意先生がたをお迎えして研究していただくという気持ちで当たって」くれたため、「家族的で、まことに暖かいふんい気（注：ママ）で研究をすることができた」と評価する者もいた〔佐原一九六一・六八〕。

以上、研究員による報告から研究合宿の様子について概観してきた。研究合宿が開催されるようになった昭和三〇年代の宿坊には、少人数で宿泊できる小部屋は存在せず、食事をするのも、勉強をするのも、寝るのも、全て大広間で行っていた。しかし、このような宿坊の空間構造も、昭和四〇年代に入ると変化していくこととなる。

武州御嶽山では、昭和四〇年代頃から東京都青年野外旅行活動宿泊所の指定を受け、宿坊の増改築が行われた。また、昭和五〇（一九七五）年四

表2 宿坊の室数と宿泊収容人数

青梅市観光協会 1975（推定）『東京の国立公園 青梅 水と緑のふるさと』より筆者作成

宿坊名	室数	宿泊収容人数	宿坊名	室数	宿泊収容人数
秋山荘	5	30	原島荘	8	60
憩山荘	13	70	藤本荘	8	60
うつぼや	9	50	宝寿閣	9	50
大道	10	40	町久保田	8	50
片柳荘	10	40	麻知家	9	50
駒鳥山荘	12	60	丸山荘	8	50
山楽荘	17	60	御岳山荘	18	100
山香荘	13	65	南山荘	9	30
静山荘	12	60	山中荘	16	65
高名荘	10	50	旅荘 靱矢	8	50
登奈荘	5	40	嶺雲荘	14	65
西須崎	6	50	原島荘	8	60
能保利	8	40	藤本荘	8	60

月時点では、多くの宿坊で室数が増加している。各宿坊の室数と宿泊収容人数をまとめたものが表2である。最も少ない室数で五室、最も多い室数で一八室、最も少ない宿泊収容人数で三〇人、最も多い宿泊収容人数で一〇〇人と、宿坊の規模に大小あるが、どの宿坊も複数の客室を有していることが確認できる(表2参照)。

そして、昭和五九(一九八四)年に行われた東京都教育委員会の調査時点では、宿坊二八軒中、旧態を留めるのは八軒のみで、二〇軒の宿坊が増改築を行ったと報告されている[東京都教育委員会一九八六・二二]。このことから昭和四〇年代から五〇年代の武州御嶽山は、宿坊の増改築が盛んに行われていた時期であったといえよう。

一方で、このような宿坊規模の差異には注意が必要である。国立公園に指定されている武州御嶽山は、山上に従来なかった新たな建物を建てたり、国立公園に指定される以前から当地に居住していた者以外は、新たに居を構えて住んだりすることは原則できない。すなわち、旧来からの御師家の持つ土地などの資本は、固定化されており、現在に至るまで旧来の有力御師とそれ以外の御師とは経済的な格差や階層差が存在している。また、宿坊の増改築の費用も、その多くは講社からの初穂料や寄進によって賄われるため、従来から広範な旦那場を持ち、多くの講を所持する御師家の方が、施設の整備に対応しやすく、新たな客を受け入れやすいという特徴があったと考えられる。

六、伝統的な信仰の山としての武州御嶽山

これまで昭和二〇～五〇年代の武州御嶽山の状況を、鉄道網の発達や林間学校、合宿などの観点から概観してきた。それでは、昭和二〇～五〇年代の御嶽山は外部からどのように評価されていたのだろうか。ここでは、山外の資料を用いて、当時の武州御嶽山の評価や外部からのまなざしを確認していきたい。

そのために、大多摩観光連盟事務局が昭和五六（一九八一）年に発行した、『大多摩地域の観光 再開発への展望——一〇〇年計画——』の内容を確認していく。この資料には、大多摩地域一帯の観光の取り組みについての現状と評価、改善すべき点、そしてその対策が記されている。昭和二五（一九五〇）年に秩父多摩国立公園として指定されてから、およそ三〇年後には、武州御嶽山やその一帯の観光化への取り組みがどのように評価されていたのか、この資料を使って確認していきたい。まず、昭和五六（一九八一）年当時の武州御嶽山に対する外部からの評価を見てみたい。

昔からの伝統的な信仰の山として、御師の家があった。いまでは旅館となっている。伝統的な部分は昔からの講であり、新しい部分は観光である。

御岳山は信仰の山としての伝統に対する見方と、シンボルとしての考え方が共存している。最近では、旅館業に漸次移り変わってきているが、経営感覚は旧態的な面が多く残っている。

最近、都内から子供の団体が増えてきている。と同時に、山が険しいため遊び場がない。……中略……また、ウィークデー対策として、中高年者・婦人グループ利用のための対応が必要となっている。このためには、萱ぶき家とか旧家などを保存して、御岳の歴史と文化を残す方法を考える必要となっている。近年、講の関係者とハイキングの利用者は、減少しているが、積極的な維持対策を持つ必要がある「大多摩観光連盟事務局編 一九八一・六八」。

以上の記述では、まず武州御嶽山を「伝統的な信仰の山」と位置付けながらも、昭和五六（一九八一）年の時点で観光地としてのイメージが定着しているように読みとれる。また、従来から武州御嶽山には「御師の家」があったが、

今では旅館になっていると説明し、昔からの伝統的な部分として講を、新しい部分としては観光を挙げ、現在の武州御嶽山は講と観光を両立しながら成立していると論じている。

そして、「御師の家」は、最近「旅館業」に移ってきているが、その一方で、「経営感覚は旧態的な面が多く残っている」という。これまで、武州御嶽山の観光の側面を中心に概観してきたが、それでは、以下、昭和戦後期の講の動向について、聞き取り調査で得たデータを提示することで確認していきたい。

私が（注：嫁に）来たときはまだ講が華やかだったから、昭和四〇年代後半から五〇年代までは講は泊りが多かった。三〇人くらい泊まっていた。雑魚寝みたいだけど、お布団からご飯から。だって夜朝でしょ。みんな朝も夜も飲むわけよ。神社行つて直会だから。……中略……昭和四〇年代から五〇年代、そう、良き時代。その当時はね、講社がバンバン来ていて、太々神楽も何十も上がったって頃ですよ。太々神楽が上がるとそのお宅の方におめでとうございますって挨拶するの。一つ太々あげると一年食べていけるくらいっていう話。だから人もいっぱい雇えるし、人も安かったせいもあるけど、結構お大尽でいられたんじゃない？ いられたんだと思う。¹⁴

まず、「御師の家」は根本的に、講社のための宿泊施設であり、昭和四〇年代から五〇年代にかけて、講は泊まりが多く、一度に三〇人ほど宿泊することもあったという。また、「講社がバンバン来ていて、太々神楽も何十も上がっていた」そうだ。

ここで講員によって作成された資料を概観し、当時の状況を把握したい。新小岩御ノ講の昭和三九（一九六四）年度の記録によると、講員以外の参加者希望者（講外登山者）を募り、代参者の同額の一時金二五〇〇円を納めて参加

したという。昭和三九（一九六四）年度の講外登山者は二一名で、代参者七名を大きく上回った「葛飾区郷土と天文の博物館編一九九四・七―八」。「このように、旅行ブームによる講外登山者の増加と一時金で行けるような暮らしのゆとりができたことよって、昭和四〇年からは講金の積立てをやめ現在の総参り式に変えた」と述べられている。総参りとは、講員全員で御嶽神社に参拝することである。このような参拝形態の変化によつて、「昭和四〇年の参加者は一挙に三八名にふくれあがつた「同・八」という。

新小岩御メ講の事例のように、従来の講の代表者数人で代参をするという参拝形態から、総参り、もしくは参加希望者を募つて参拝するという形態への変化は、同時代的に他の講でも起こつていたと推測される。例えば、小杉御嶽敬神講は、昭和二五（一九五〇）年から、四年ごとに太々神楽を奉納しているが、その参拝形態も、講員全員参加の総参りになっているそうだ「小林一九九七・三」。このように戦後における講社の参拝形態の特徴として、数人の代参から数十人での総参り、希望者を募ることでの参拝者の増加と形式の変化が挙げられるだろう。

また、戦後の昭和三五（一九六〇）年以降、石造物が盛んに建立されるようになることにも留意したい「時枝一九八六・二〇八」。昭和三〇（一九五五）～三九（一九六四）年には一〇基、昭和四〇（一九六五）～四九（一九七四）年には二二基、昭和五〇（一九七五）～五九（一九八四）年には四五基に増加している。これらの石造物七七基の内、六〇基が参拝記念碑であると報告されている「時枝一九八六・一〇九」。このことから、講碑を建立できるほどの経済的な余裕のある講が増加していたと考えられる。

そして、御岳登山鉄道年間乗車数を参照すると、昭和二六（一九五一）年に御岳登山鉄道が営業再開してから、乗車数は漸次上昇し、昭和四八（一九七三）年に七二万人、翌年の昭和四九（一九七四）年には七二万二〇〇〇人を記録、乗車数は戦後期における第一次のピークを迎えることとなった。

以上確認したように、戦後、講社の参拝形態が数人の代表者による代参から、講員全員参加の総参りに変化しており、一度の参拝で「御師の家」に宿泊する人数が増加していた。また、昭和三〇年代から五〇年代にかけて、講社による参拝記念碑の建立が盛んになっていったことから、昭和三〇年代から五〇年代にかけては、講社の活動が盛んであった様子がうかがえる。そして、講社を受け入れる宿坊で働く人々にとっても、その年代は、多くの講員が参拝に訪れ、太々神楽を奏上し、御師たちが「お大尽」でいられた「良い時代」であったと語っている。

戦後の武州御嶽山における「御師の家」(宿坊)は、都民観光の家が開業し、「旅館業」の側面を持ちながらも、講社の宿泊施設としての側面も維持しており、従来からの重要な経済基盤である講を重要視する意識を持ち続けていたことがわかる。

なお、大多摩観光連盟事務局は、武州御嶽山を観光の拠点として発展させるためには、これまでの宿坊の経営感覚を、旅館の経営感覚に転換することが必要と述べており、そのために、宿坊を個室へ切替えて、部屋に鍵を取り付け、トイレは水洗にするべきだと提言している[大多摩観光連盟事務局編一九八一・七五]。このような観光開発の方針について、当時、武州御嶽山の人々はどのような意見を持っていたのだろうか。以下の記述を紹介することで考察してみたい。

先日、御岳に関係するある主要な人物に会った際、その方は「御岳山は変わった。昔の生活を思えば今は天国だ。これ以上御岳を開発して(注…人を集めること)自然を損なっては何もなくなるし、人も来なくなる。もう人を集めるのはこの辺でよいのではないか」と言われた。昔の生活に比べて今の生活が良くなったと言われたのは、いみじくも観光の必要性を主張されたと思われるが、御岳一帯の観光のあり方を決めるのは地域の方々の

意思の問題であるから、その結論に依らなくてはならないが、開発に対する一つの考え方であると思う「大多摩観光連盟事務局編一九八一・六九」。

武州御嶽山の代表者は、今後の観光開発の方針について、観光開発したことにより、昔と比べて今の生活は良くなったと認めながらも、これ以上開発し、観光客を呼び込むことには意欲的ではないと述べている。すなわち、大多摩観光連盟事務局が提案する旅館業的な経営感覚の転換は行わず、観光客への対応を行いつつも、これまで通り講社への対応を主軸としながら宿坊の経営を行うことを意味している。

しかし一方で、講の関係者とハイキングの利用者は減少しているとも報告されている。ここで、ケーブルカー再開後の乗客数と、その内訳に関するデータを提示し、講の関係者がどのくらい武州御嶽山にやってきたのか確認していく。表3は、ケーブルカーの乗車数の内訳をまとめた表である。戦後、昭和二六（一九五二）年に営業を再開した御岳登山鉄道では、代参などで武州御嶽山に訪れる講員に対して特別乗車券を発行しており、ケーブルカーの乗客を、講員とそれ以外の一般客とで区別して把握していた。表3を参照すると、営業再開後、ケーブルカーの乗客数は漸次増加傾向であったことがわかる。

一般客と講員の数の推移についてそれぞれみていくと、運転を再開した昭和二六（一九五二）年の一般客の乗車数は一七万人台だが、その翌年の昭和二七（一九五三）年には、三〇万人を超えている。その後も乗車数は増加し、昭和二三（一九五七）年には四〇万人、昭和三八（一九六三）年には五〇万人、さらに昭和四八（一九七三）年には、七〇万人に達している。このように一般客は、乗車数の増加率が高いことがうかがえる。

一方で、講員の乗車数をみていくと、運転を再開した昭和二六（一九五二）年の乗車数は五〇〇〇人台だったが、

その翌年の昭和二七（一九五二）年には、一万四〇〇〇人台に到達している。その後、昭和三二（一九五七）年には、一万七〇〇〇人台を記録したが、ここをピークとして、昭和三三（一九五八）年に半減（急減）したあと、徐々に回復し、一万八人台から一万五〇〇〇人台の間を行ったり来たりしている状況である。このことから、講員の乗車数は、一般客と比べると乗車数の推移が少ないことがわかる。したがって、大多摩観光連盟が指摘する、講の関係者とハイキングの利用者の減少について、特に、講の関係者において減少傾向がみられるといえよう。

七、分析

以上、戦後の武州御嶽山における御岳登山鉄道の職員による参詣者誘致の取り組みと、

表 3 ケーブルカー乗車数内訳

西海賢二 1983『武州御嶽山信仰史の研究』316頁を基に筆者作成

年度	一般客数	講員数	講員数 比率	年度	一般客数	講員数	講員数 比率
昭和 10 年	164,311			昭和 33 年	376,661	8,551	2.27
昭和 11 年	162,814			昭和 34 年	388,539	9,195	2.36
昭和 12 年	138,147			昭和 35 年	431,631	9,754	2.25
昭和 13 年	200,891			昭和 36 年	466,090	10,099	2.16
昭和 14 年	260,222			昭和 37 年	476,421	10,323	2.16
昭和 15 年	287,556			昭和 38 年	509,977	10,782	2.11
昭和 16 年	308,820			昭和 39 年	504,166	10,935	2.16
昭和 17 年	376,860			昭和 40 年	520,785	11,455	2.19
昭和 18 年	294,707			昭和 41 年	523,570	12,270	2.34
昭和 26 年	174,768	5,722	3.27	昭和 42 年	502,804	11,060	2.19
昭和 27 年	308,371	14,608	4.73	昭和 43 年	523,197	12,286	2.34
昭和 28 年	328,788	14,053	4.27	昭和 44 年	523,172	12,311	2.35
昭和 29 年	354,729	15,671	4.41	昭和 45 年	559,938	12,573	2.24
昭和 30 年	388,460	17,544	4.51	昭和 46 年	570,144	14,010	2.45
昭和 31 年	386,733	16,623	4.29	昭和 47 年	595,508	15,087	2.53
昭和 32 年	402,825	17,354	4.30	昭和 48 年	766,686	14,857	1.93

御岳観光協会およびブルー観光が幹旋した林間学校・教員研修の状況について確認してきた。ここでは、本稿のはじめに記した問題意識を振り返って、昭和戦後期の武州御嶽山にどのような動機や目的を持つ人々が訪れていたのか確認する。

まず、昭和戦後期に武州御嶽山を訪れていた人々は、①講社、②林間学校の参加者および教員研修の参加者、③一見の客の三つに分けられる。先行研究においては、戦後に観光化が進行するといわれていたが、終戦直後は、多くの講社が御嶽山を訪れていた。しかし、御岳登山鉄道の統計データをみると、昭和三二（一九五七）年までは増加傾向であったが、昭和三三（一九五八）年に半減（急減）し、その後は回復傾向にあった。

そのような講社利用の減少が見られるようになる昭和三〇年代から、武州御嶽山では、御岳観光協会による誘致活動やブルー観光との提携により、林間学校や教員研修を受け入れるようになったことで、これまでとは違った形で宿坊を利用する人々が増加していくこととなる。林間学校の参加者、教員研修の参加者は、両者とも、毎年参加者は入れ替わるが、特定の宿坊と継続的な関係性を結んでいる学校関係の固定客という特徴を有する。また、一見の客は、定宿がなく、基本的にはどの御師の宿坊に宿泊してもよい。すなわち、講社と御師が結ぶ師檀関係のように固定化された関係性ではなく、ゆるやかに御師や宿坊、神社とつながっている参詣者である（図2参照）。

図2の同心円は参詣者を表し、その右側には各々の参詣者と関係性を結んでいる聖地運営の担い手を記した。また、円の色が異なるのは、中心に向かう

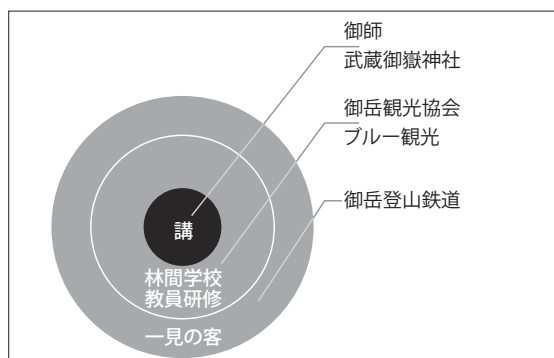


図2 聖地運営の担い手と参詣者の関係性

ほど固定的な関係性、外縁に向かうほど流動的な関係性を色の濃淡で示しているためである。

こうした師檀関係とは異なるゆるやかな関係性を武州御嶽山に形成した担い手が、御岳登山鉄道とブルー観光である。従来、武州御嶽山を運営する担い手は、①神社や宿坊の運営を担う御師、②御師の合議制で運営される武蔵御岳神社、③山上の宿坊や食事処・土産物屋などの代表者からなる御岳観光協会の三者であったが、昭和戦後期には新たに、④林間学校を幹旋するブルー観光、⑤一見の客を誘致する御岳登山鉄道が加わった。つまり、ブルー観光や御岳登山鉄道は、山外の企業であるが、林間学校を幹旋することや一見客の誘致を通して宿坊運営の方針に影響を与えたといえよう。

特に、御岳登山鉄道の職員である影山は、様々な形で武州御嶽山を宣伝した。そのような広報活動によって、数ある候補の中から武州御嶽山や武蔵御嶽神社、宿坊を選択して訪れる、流動的な存在である一見の客にアプローチすることに成功した。加えて、これまで力を入れてこなかった初詣客の誘致活動のために御師を説得していたことから、こうした影山の活動は、従来御師のみで検討していた神社運営の方針に関して、御師以外の担い手が関与したという点でも特筆される出来事である。このように、ブルー観光と御岳登山鉄道は共に外部の企業であるが、武州御嶽山の運営、管理に携わっていることから、双方武州御嶽山の運営に携わる担い手として位置づけることが可能である。

八、おわりに

本稿では、昭和戦後期の武州御嶽山を取り巻く担い手と参詣者の関係性について論じてきた。最後に、冒頭で言及した、聖地や霊場がどのような参詣者を受け入れながら存続してきたのかという問いに対して応答して論を閉じたい。

これまで確認してきたように、昭和三〇年代から武蔵御嶽神社や各宿坊において、重要な経済基盤である講の利用が減少していた。一方で同年代から、武州御嶽山の各宿坊では、林間学校と教員研修を受け入れていた。加えてこの時期は、御岳登山鉄道職員の影山の広報活動によって、観光目的で訪れる一見の客が増加していたことも特徴として挙げられる。このことから、昭和戦後期の武州御嶽山は、全体的には減少傾向にあった講に代わって、学校関連の固定客と観光目的の一見の客によって、神社や宿坊の運営が維持されていたといえよう。言い換えれば、昭和戦後期の武州御嶽山は、師檀関係という固定的な関係性に加えて、観光会社や鉄道会社によってもたらされた流動的な関係性の二つの関係性を持つことができたため、存続することが可能だったと考えられる。

だが、昭和四〇～五〇年代においては、講員全員で代参する総参りを行う講や、講碑を建立する講など、盛大に活動する講が確認されている。この活発に活動する講の存在と、講の宿坊利用の減少という、一見矛盾する傾向をどのように捉えるべきか、別の機会で考察したい。

参考文献

青柳周一二〇〇二『富嶽旅百景―観光地域史の試み―』角川書店。

天田顕徳二〇二〇「山伏文化」の資源化・商品化―山形県・手向集落を事例に―『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、一六九―一八八頁。

乾賢太郎二〇一六「高尾山と鉄道開発―京王電鉄を事例に―」『山岳修験』五八号、三九―四七頁。

卯田卓矢二〇一四「比叡山への鋼索鉄道建設における延暦寺の動向」『交通史研究』八四号、四〇―五九頁。

——二〇一五「戦後の延暦寺における参拝者誘致活動とツーリズム」『旅の文化研究所報告』二五号、九三—
一一〇頁。

——二〇二〇「ツーリズムによる聖地運営システムの構築—比叡山延暦寺を事例として—」『現代宗教とスピ
リチュアル・マーケット』弘文堂、一四九—一六八頁。

靱矢嘉史二〇一五「御師と神社—武州御嶽山御師の特色—」『古文書にみる武州御嶽山の歴史』、四一—六三頁。
江口正二一九六〇「指導部のページ」教育研究員の御岳研究集会」『教育じほう』一五五号、六六—六九頁。

青梅市郷土博物館二〇一四「青梅線開通二二〇周年開館四〇周年特別展」青梅市郷土博物館。

影山豊一九七九『山の駅長室 奥多摩・御岳山の四季』世界社。

葛飾区郷土と天文の博物館編一九九四『新小岩御メ講—武蔵御嶽神社奉納大しめ縄一四一年—』葛飾区郷土と天文
の博物館。

小林康彦一九九七「お神楽奏上は四年目ごとに」『武州みたけ』九号武蔵御嶽神社、三頁。

佐原正三郎一九六一「指導部のページ」『教育研究員御岳研究集会』の歌誕生」『教育じほう』一六六号、六六—六九頁。

鈴木章生一九八六「御岳山御師と祭祀」『青梅市御岳神社集落文化財調査報告』東京都教育委員会、一一六—一二三頁。

鈴木正宗二〇一五『山岳信仰—日本文化の根底を探る—』中央公論新社。

大多摩観光連盟事務局編一九八一「大多摩地域の観光 再開発への展望—一〇〇年計画—」大多摩観光連盟事務局。

高田彩二〇一七「伝統保持と観光化からみる山岳聖地の真正性について—武州御岳山を事例に—」『大正大学大学
院研究論集』四一号、一二九—一二五頁。

——二〇一八「宿坊経営における女性家族の役割—武州御嶽山を事例として—」『國學院大學研究開発推進機構

日本文化研究所年報』一一号、七〇―八七頁。

東京都環境局自然環境部二〇一一『御岳ビジターセンター周辺環境基礎調査報告書』自然教育研究センター。

東京都教育委員会一九八六『青梅市御岳神社集落文化財調査報告』東京都教育委員会。

『秩父多摩国立公園』指定祝賀大多摩協賛会一九五〇『観光の大多摩』社団法人大多摩観光協会。

對馬路人二〇一二『鉄道と霊場―宗教コーディネーターとしての関西私鉄―』山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』世界思想社、三二―五七。

時枝努一九八六『御岳御師集落の石造物』『青梅市御岳神社集落文化財調査報告』東京都教育委員会、一〇四―一五頁。

西海賢二一九八三『武州御嶽山信仰史の研究』名著出版。

――二〇一四『武州御嶽山』『日本の霊山読み解き事典』柏書房、一五八―一六三頁。

馬場慶二二〇一八『序文』『武州御嶽山の史的研究』岩田書院、一―二頁。

平山昇二〇一二『鉄道が変えた社寺参詣―初詣は鉄道とともに生まれ育った―』交通新聞社。

――二〇二〇『近代日本の鉄道と社寺参詣』『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、一二九―一四八頁。

宮崎ふみ子二〇〇三『富士山における女人禁制とその終焉』『環』一二号、二七一―二八三頁。

註

- (1) 例えば、富士山への参詣・登山口として栄えていた須走村の御師が参詣者などのような関係を取り結んでいたかを問う青柳周一の研究や、参詣者誘致のため、富士山の女人禁制を段階的に廃止するよう働きかけていた、吉田村の御師の動向に注目した宮崎ふみ子の研究などが挙げられる「青柳二〇〇二」「宮崎二〇〇三」。
- (2) 「鉄道網の発達による武州御嶽山の変容―大正期から昭和戦前期に注目して―」長谷部八朗編著『講』研究の可能性Ⅴ』慶友社、近日発行予定。
- (3) なお、本稿は、「宗教と社会」学会第三〇回学術大会（二〇二二年六月）で発表した「宗教集団の生存戦略としての観光化―武州御嶽山を事例に―」および、第四二回日本山岳修験学会飯田学術大会（二〇二二年一〇月）で発表した「昭和戦後期の武州御嶽山―生存戦略としての観光化―」がもとになっている。
- (4) 話者A（一九五五年生）に対する聞き取り調査（二〇一五年二月二六日）より。
- (5) 書名にも入っている「大多摩」とは、多摩川及秋川の流域を含む全西多摩郡に大菩薩峠、柳沢峠以東の山梨県小菅村・丹沢山村の全部と神金村の一部を指している「『秩父多摩国立公園』指定祝賀大多摩協賛会一九五〇…一」。
- (6) 山楽荘は現在も宿坊として現存している。
- (7) 註2参照。
- (8) 影山は、同時期にはとバスの路線の誘致活動を行っている「影山一九七九…一五八」。影山は、はとバスの本社へ足を運び、「路線の設定や同業者への了解を求めたり、駐車場の確保、運賃問題など、具体的な交渉を重ね、

さらに東京陸運局へ旅客運賃の割引申請、連絡運輸の許可を求める手続き等」を行った。その結果、昭和四七（一九七二）年七月二三日から毎休日奥多摩バレーラインコースとして、はとバスの奥多摩・御岳山の運行が開始した〔同：一五九〕。そして、はとバスの奥多摩・御岳山のコースが好評だったため、翌年の昭和四八（一九七三）年三月には、御岳・奥多摩ファミリーコースとして定期路線許可を受けた。

（9）武州御嶽山の林間学校の誘致については、「高田二〇一八」でも論じているので、詳細は上記を参照されたい。

（10）朝日新聞 昭和三五（一九六〇）年七月二二日 朝刊「奥多摩御岳山の林間学校へ都内から第一陣」。

（11）話者C（一九四五年生）に対する聞き取り調査（二〇一八年三月一三日）より。

（12）毎日新聞 昭和四四年九月四日 都内総合版 二〇頁「御岳山の林間学校が開山以来のブーム」。

（13）『教育じほう』一五五号、一五六号、一六六号に掲載されていた御岳研究合宿の記事をもとにして、二泊三日の研究合宿のスケジュールをまとめた。

（14）話者D（一九五一年生）に対する聞き取り調査（二〇一八年六月一四日）より。